

日本の古典をスペイン語の世界へ

伊藤 昌輝

日本人は古代から不断に朝鮮・中国・インドの文化を学び、明治以降は欧米の文化の吸収に余念がなかった。日本は外の世界から文化を受け入れることに熱心だが、日本から外に働きかけることはほとんどしなかったと言っても過言ではないだろう。私は永らく中南米に住むうちに、逆に日本人の物の考え方、感じ方、宗教観や美意識を彼らに伝えたい、こちらからもっと向こうに発信したいという思いを強く抱くようになった。そしてそれにはやはり日本の古典文学が大事な媒体になるのではないかと思った。また、グローバリゼーションは、多くの国々や人々が国際社会に組み入れられていく過程であると同時に、それぞれの国に固有のものを擁護し、かつそれを新たに定義していく過程でもあると思う。

そこで最後の任地ベネズエラで、鴨長明の『方丈記』に取り組むことにした。これには女流詩人ヨランダ・デル・ノガル女史の協力を得、また現地の大学および新聞社の支援も受けて出版に漕ぎつけた。副題を「庵からの人生賛歌」とした。故中野孝次氏が『方丈記』は無常をうたった文学ではなく、心の自由を謳歌した数寄の文学である、一見消極的なようだが、これが実は一番強い生き方なのだ、と評価されているのにヒントを得たものだ。この作品を通し

て日本的なものの見方、感じ方をカトリックの支配する中南米の人たちに理解して貰えればとの思いだった。この訳を読んだ中南米の友人からこんな便りが届いた。「美しさと叡智にあふれた作品だ。われわれの時代にもそのまま当てはまる永遠の真理を平易なことばで語っている。なんども読み返した。」(マイアミ大学南北センター所長)、「実にすばらしい作品です。そして詩が美しい。心の奥深くに迫るものがあります。人生の教訓にも満ちています。」(ベネズエラ外務省アジア・アフリカ局長)、「この本を読み終えると、信じ難いほど内面の安らぎを感じます。ちょうど弟が致命的な事故に遭い、生涯意識不明の状態に陥り、私にとってとても苦しいときでしたから。」(元ベネズエラ官房長官)、またある批評家は現地紙に、「長

明の歌声はスペイン語の世界に高らかに響き渡るであろう」と書いてくれた。その後、国連改革中南米担当大使としてホンジュラスを訪れた際、私の駐在時に大統領であったカルロス・フローレス氏に面会し、同書を1部贈呈すると、冒頭の句「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」に目を通すなり、ギリシャの哲人ヘラクレイトスのせりふを復唱された。「君は同じ川に二度入ることはできない。なぜなら、二度目に入ったときには川の流れも君自身もすでに変わっているから」と。そして鴨長明とギリシャの哲人の考えは実によく似ている、と感慨深げだった。

退官後はこの仕事にできるだけ専念することにし、次の作品は室町期の珠玉の歌謡を集めた『閑吟



訳著作図書

集』にした。次第に中世から近世へと移っていく時世粧や、思想や官能の解放感をうたったあとがみられる。これには「小さな楽園の歌」という副題をつけ、アルゼンチンで出版した。出版に当ってはアルゼンチンの文豪ホルヘ・ルイス・ボルヘスの未亡人マリア・コダマ女史（日系二世）の協力を得た。ボルヘス氏自身も日本の詩歌に並々ならぬ関心を示し、いわば“遊び”として「俳句」を17句創作している。また、ボルヘスとマリア・コダマ女史は『枕草子』を共訳している。ついでながら、ノーベル文学賞を受賞したメキシコの詩人オクタビオ・パスも俳句に深い関心を示していたことは周知の事実である。さらに、ガルシア・マルケスの『わが悲しき娼婦たちの思い出』は川端康成の『眠れる美女』に触発されて書いたものと自ら告白しており、日本文学のスペイン語圏への影響が垣間見られる。

三つ目の作品は平安末期の今様の集大成である『梁塵秘抄』にした。NHKの大河ドラマ「平清盛」の主題歌（あそびをせんとやうまれけむ／たわむれせんとや生まれけむ／遊ぶこどもの声聞けば／わが身さえこそゆるがるれ）はここから取られている。この作品は小説家兼ロス・アンデス大学教授エドノディオ・キンテロ氏の協力を得つつ、国際交流基金の助成も得て、ベネズエラで出版した。

その次はブエノスアイレス大学の日本文学教授から『芭蕉紀行文集』を訳さないかとの誘いを受け、それを選んだ。『野ざらし紀行』、『笈の小文』、『おくのほそ道』など6編の紀行・日記文である。芭蕉の散文だが、もちろん俳句が随

所に顔を出す。

スペイン語は中国語、英語に次いで多い母語人口を誇る言語で、21の国や地域で話されている。したがって、小さな出版社から出た本はなかなか全地域に行き渡らないのが辛いところだ。しかしこの『芭蕉紀行文集』は、スペイン語圏でも最も大きな出版社の一つから出たので、幸いスペインを始めスペイン語諸国に広く行き渡っている。

その後、井原西鶴の『世間胸算用』の翻訳を手掛け、これはベネズエラで出版された。大みそかの一日24時間に限定し、年の瀬を越すか越せぬかにあくせくする町人の悲喜劇を描いている。西鶴は17世紀末にすでに「金が仇」の世の中を描き上げた世界最初の作家といわれており、この作品は日本における資本主義誕生の記録ともいえよう。

日本では神戸の大盛堂書房が私の仕事に関心を示してくださり、いくつかの対訳版が相次いで出版された。まずは『スペイン語で奏でる方丈記』（2015年）、これは日本翻訳家協会の特別賞をいただいた。次に『スペイン語で詠う小倉百人一首』（2016年）、さらに『スペイン語で親しむ石川啄木 一握の砂』（2017年）、そして2018年末には『スペイン語で旅する おくのはそ道』が出された。

翻訳上の一番の苦労は、実に曖昧な日本語をきわめて論理的なスペイン語にどう移し替えるかということであろう。スペイン語の名詞はすべて性別や単複、それに主語や人称が明確であるが、日本語はそれが極めてあいまいだ。たとえば、「枯れ枝に鳥のとまりたる

秋の暮」という句の場合、鳥は一羽なのか複数なのか、「秋の暮」は季節の暮か一日の終りか。芥川龍之介の短編に「奉教人の死」というのがある。美少年の奉教人（キリスト教徒）が主人公だが、結末に実は主人公は女性であったことが明かされる。スペイン語ではクリスチャンというとき、女性か男性かを明確にする必要がある。題名の“奉教人”の性を男性にするか女性にするか。また、両言語の間には完全に合致する語彙の存在しないことが度々ある。卑近な例では「花見」や「月見」という言葉はスペイン語にはない。さらに百人一首には枕詞や掛詞がある。小野小町の「わが身世にふるながめせしまに」では、“ふる”に「経る」と「降る」、「ながめ」に「眺め」と「長雨」が掛けられている。押韻にこだわると掛詞が訳せない。言語と文化は表裏一体であり、翻訳とは字面ではなく、言葉の裏に隠れている文化を表現することであり、一番難しいところは文章に書かれていない部分をどう伝えるかということかも知れない。萩原朔太郎氏は「すべての善き翻訳は「創作」である」という。「詩の翻訳に語学上の詮議は無用で、むしろ訳者自身の個人的主観によって、自由に勝手に翻案化してしまふ方が好いのである。逆説的に言へば、すべての訳詩は誤訳であるほど好いといふ結論になる」と述べている。

百人一首のスペイン語訳が世に出ると、これをもとにスペイン語で詠う「百人一首コンサート」を行おうというグループが結成された。ピアニストの中根美枝さんの作曲・演奏・歌にスペイン出身の



スペイン語で詠う「百人一首コンサート」

エレナ・ガジェゴ先生によるスペイン語の朗読、さらにはメキシコ出身のドゥルセ・カバイエロさんによるスペイン語のナレーションも加わり、好評を博した。これまで国立の白十字、目黒のラテン文

化サロン・カフェイリブロスおよび明治記念館と合わせて6回開催した。明治記念館での公演は日本ラテンアメリカ婦人協会の主催で行われた。百首達成記念コンサートとなる次回第7回目は2019年

5月12日（日）に表参道にあるウイメンズ・プラザの大ホールで行う予定である。収容人数246席すべてを招待客として開催したく、その開催費用にはこの企画に賛同していただける法人、個人の方々の協力を仰げないものかと考えている。

外国の方には、日本人の心や性^{さが}を知りたければ百人一首に親しみなさいと言いたい。また、現代の日本人にとっても、自国の言語の古典を異なる言語で読み、異なる文化のプリズムを通して、新たな視点で自らの文化を見直すというのも実に興味深い試みではないだろうか。

（いとう まさてる 日本ベネズエラ協会会長、
元駐ベネズエラ大使）

